

急に色めき立つて來た彗星界

彗星界は此の數年來可なり淋しかつた。専門家には、それでも、毎年若干の微光彗星が現はれて、毎日毎夜の位置測定に忙しい日もないではなかつたが、光りは大抵皆望遠鏡を必要とする程度のものであつたから、物理的な研究は殆んど不可能であつた——こんな憐れな有様であつたから、世間のアマチュアたちも、彗星といふものから殆んど全く縁が切れたらしく思はれた。老人の昔し話に聞かされるやうな長い尾を持つ立派な彗星などは、こん後、又、何時になつたら見られるのかと、心細く思はれた。

ところが、いよいよ今1931年に至つて、俄然、彗星界は色めき立つて來た。——但し、今年も、年の初めは、やはり、彗星は何一つ見えず、確かに見える筈のエンケ彗星さへ、日本は言ふに及ばず、歐米諸國に於いてさへ、誰も之れを發見に成功せず、若しや、今度はエンケが見えないといふ珍らしいレコードが作られるのでは無からうかと案ぜられた。

しかるに、今年も漸く半ば過ぎたと思はれる七月中旬になつて、コペンハーゲン¹の國際天文同盟からサアキュラ¹ No. 325 が到着した。此の中に、はからずも、**エンケ彗星** が南米アルゼンチン國コルドバ天文臺で發見されたといふ通知が載せられてゐた。どうしたわけか、之れは電報によらず、サ¹キュラ¹だけの通信であつた。發見者は Bobone 氏といふ、余り名を聞かない新人、發見日は去る六月21日、場所は小犬座のプロシオン星の北3度のあたり、光度は9等級であつた。

この報知の後、南阿ユニオン天文臺のウド氏から、去る六月14、16兩日同所で撮影した寫眞板に、エンケ彗星が現はれて居ることを報じ、尚ほ此の觀測は引き続き六月24日まで行はれてゐることが報ぜられた。此等の觀測から見ると、エンケ彗星はマトキ¹キチ氏やクロムメリン氏の豫想より數時間早く、多分六月30日(世界時)頃に近日點を通過したものらしい、

このエンケは目下¹さそり¹座の南方を東行しつゝあるから、觀測は困難であるが、強力な望遠鏡ならば九月頃から見え始めるだろう。

エンケ彗星の発見と相前後して、今年の第二彗星1931bが、米國カリフォルニアにゐる日本人**長田政二氏**によつて発見されたことが、ハーバード大學とコペンハーゲンとを通じて電報された。長田氏加州はプロトリに居る人で、長く以前からの我が同好會員である。発見は取り敢へずキルソン山天文臺に報告され、其所でワンマン氏が之れを確かめ、それから世界各國へ知らされたので、可なり手數を経たものである。従つて今も尙ほ本統の発見が何月何日であつたか不明である。しかし最初は獅子座 ρ 星の近くに発見されたと報告されてあるから、七月13日頃に行はれたものか？

京都の花山では此の電報を受けて、中村要氏が七月23日から毎晴夜、日没後の西天に觀測を始めた。光は6等乃至7等で、近頃珍らしい明るさであることを、クロムメリン氏も注意してゐる。

其の後米國から Zug, Berman 兩氏が七月18日、20日、22日の三日間の觀測から算出した軌道を知らせて來た。此によると、此の長田彗星は去る六月15日に近日點を通過し、傾斜 41° の軌道面を持ち、目下少しづつ地球からも遠ざかりつゝあるが、黄道より北なので、可なり長く見える筈である。去る八月10日頃、和歌山で行はれた本會天文講習會で一同此の彗星を觀望した。此の星は長さ 4° の尾があると米國から報ぜられた。詳細は花山ブレテンを見られよ、

最後に1931cといふ第三彗星が米國で **ライヴス** Ryves といふ人によつて八月13日に発見された。ライヴス氏も亦今まで名を聞かない新人なので、何所の人だか判らないが、発見後、まもなく、八月14日にシカゴ大學ヤーキース天文臺のワンビースブルック教授の觀測が報ぜられてゐる。其れによると、場所は蟹座で、光度は4等級、長さ 1° の尾がある、朝早く東天に現はれ、黄道に沿ふて東行してゐる。

花山では八月十八日朝から觀測が始められた。四等級といふ近年珍らしい明るさのものとの報告であつたから、十八日朝は中村、上田、山本、古畑の諸氏が午前3時頃から床を起きて、それぞれ大小望遠鏡をたよりに東の低い空をさがした。當時は未だ彗星の運動方向が不明であつたので、ワ

ンビースブルック教授の観測位置の附近を隈なく捜す必要があつた。暫くして、東天にはシリウス、プロシオン、木星等が現はれ、もはや日の出も近いので、ハラハラと、氣をいら立たせたが、午前4時頃、先づクク30センチ屈折鏡のドームの中から中村氏は、

「彗星の頭が見え出した!! 光度は4等!」

と、大きい叫びを擧げた、之れに勵まされて、外の人々も木星の附近に果して明るい此の彗星を見つけ出した。なるほど明るい。尾も見えてゐる。中村氏と上田氏とは測微観測をせられ、尙ほ、中村氏は16センチ反射鏡で寫眞を撮影された。此の寫眞には、僅か2分時間の曝露であるに拘らず、長さ2°ばかりの尾が二つ現はれ、更に第三の尾が曲つて見えてゐた。

天氣は其の後も引きつづき好晴であつたので、八月20日朝まで連続的に観測が行はれた。かうして、

8月14日9時29.1分(U.T.) 赤經 $8^h 4^m 32.5^s$ 赤緯(北) $22^\circ 45' 46''$ (ヅンピル氏)
 同 17, 19 14 46秒(ク) 同 8 29 03.2 同 (ク) 21 28 52 (中村氏)
 同 19, 19 41 39 (ク) 同 8 47 53.2 同 (ク) 20 16 (ク)

此の三つの観測位置から、上田、柴田兩氏は軌道の算出をせられた。其の結果、此の彗星は、軌道傾斜角 167° といふ逆行運動のもので、近日點は八月25.8(U. T.)即ち26日午前4時に通過し、其の時、太陽からの距離は $\frac{1}{20}$ 單位、即ち200萬里である事が知れた。従つて、近年に例が無い珍しい星であつて、光度は連日増加し、月末には金星を越える程の光となり、白晝にも見える筈であり、尾は、八月25日までは日出前の東天に、其の後は日没後の西天に長く見えることも豫想され、天文臺の一同は大に緊張した心持となつた。

此等の事は取り敢へず、花山ブレテンや、本會の急報によつて熱心家に通知されつゝある。

近頃、彗星界の興味ある話題は、今から二十九年も前の1902年三年4日に、獨逸ハイデルベルヒ天文臺でラインムト氏が寫眞板上に彗星らしいものを認めたけれど、其の後、観測が行はれず、萬事不明のままに残されてあつたのが、英國カニングム氏の研究により、之れは1927年にシヴスマ

ン、ワクマン兩氏が発見した **1925 III** といふ彗星と同じものであることが立證されたことである。此のシワスマン彗星は殆んど圓形に近い軌道を巡つてゐる珍らしい彗星であつて、今までの總ての彗星觀測のレコードを破り、遠日點の近くでも觀測が出来たのである。(山本)

今年九月末には **皆既月食** がある。日は
九月 27日 午前4時から5時半まで
詳細は本誌の天象欄、及び、天文年鑑第81頁を見られ
よ。

消 息 片 々

本會々長**山本一清博士**は、去る七月中旬、北海道大雪山調査會の招聘により、夫人同伴旭川に行かれ、調査並びに講演された。其の途中、水澤、盛岡、函館、小樽、札幌、東京の各地に立ち寄られた。七月22日歸洛。同24日には東洋文化夏期大學にて Japanese Astronomy in Past and Present と題する英語講演をせられ、七月27日からは鳥取縣へ、八月8日からは和歌山へ、八月22日からは倉敷天文臺へ赴かれた。同博士は九月6日 JOBK にて天文學に關する講演をされる筈。又、十一月には文理科大學の招きにより天文學講義のため約二週間廣島へ赴かれる由。

會員**古畑正秋氏**は八月中研究のため花山天文臺に滞在された。

又、會員**小槇孝二郎**、**龜井壽彦兩氏**は八月下旬花山天文臺に來訪された。